生になって、中高生の時代よりはより現実味を帯びてくるにつれ、その困難さが実感され効力感が低下しているのかもしれない。また中学１年段階ではまだあまりに先の話であってどうなるかわからない、実感として考えられないので中間的な値にとどまることによって、３年の段階より低い水準にあると思われる。「タレント」に関しては、中学３年生がピークであるが、いわゆるアイドルタレントを考えると高校・大学生になると実際問題として年齢が高すぎるという事実も影響していよう。

「尊敬される」については男女で違いがあり、女子では一貫して年齢増加とともに効力感が低下している。このような一貫した下降傾向を示したのはこの項目のみである。「尊敬される」よりも「かわいらしい」ことが女性に期待されているのであるといった、女性的な特性に関して年齢があがるにつれより敏感になることが、このような下降傾向をもたらしているのかもしれない。後にみるように「尊敬される」ことの重要度も女子ではやはり年齢とともに下降しているが、この事実はこのような解釈と一致するものである。

最後に「就職」に関しては学年による違いはみられなかった。自分の希望した仕事につくことができるかどうかに関しては、一貫してある程度肯定的にとらえているといえる。

２．将来の成功の重要度

効力感が現在のやる気を規定する上で重要だとしても、そもそも想定されている将来の成功が自分にとって重要でなければ、効力感の高低はあまり意味を持たないであろう。例えば全体的に見て「タレント」になることの効力感は低かったが、「タレント」になることは自分には無意味であり「タレント」になりたいと考えていないのであれば、その効力感が低いとしても問題とはならないであろう。

そこで、先に設定した将来の成功事態について、成功することの重要度についても尋ねた。まったく同一の１０項目について、「あなたにとってどのくらい重要ですか」という問いを設定し、「とても重要」「かなり重要」「やや重要」「あまり重要でない」「まったく重要でない」の５段階の選択肢を設け、そこから一つを選択させる形で重要度に関する回答を求めた。

「とても重要」から「まったく重要でない」までの５段階の回答に対し、それぞれ５～１点を与えた。

学年別の平均値を、男子については図４－３に、女子については図４－４に示した。

まず全体的に見ると、「結婚」「よい親」および「就職」がもっとも重要視されている。

一方「タレント」の重要度は低い。学業達成関連の「成績」や「進学」は学年による違い大きい。

図 4-3 学年別重要度平均（男子）

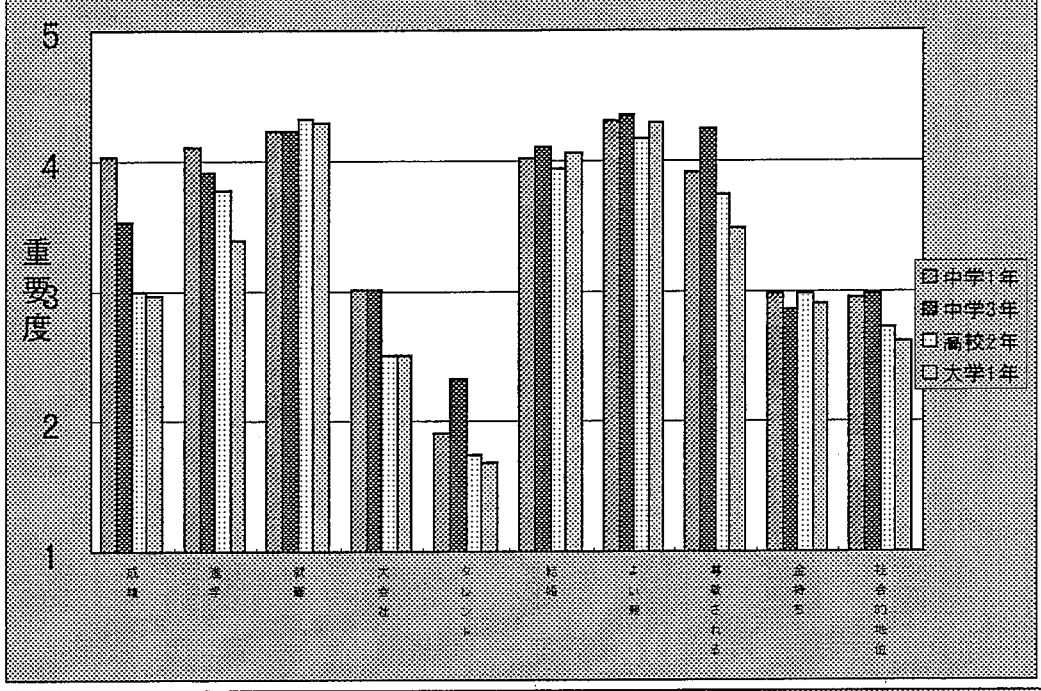
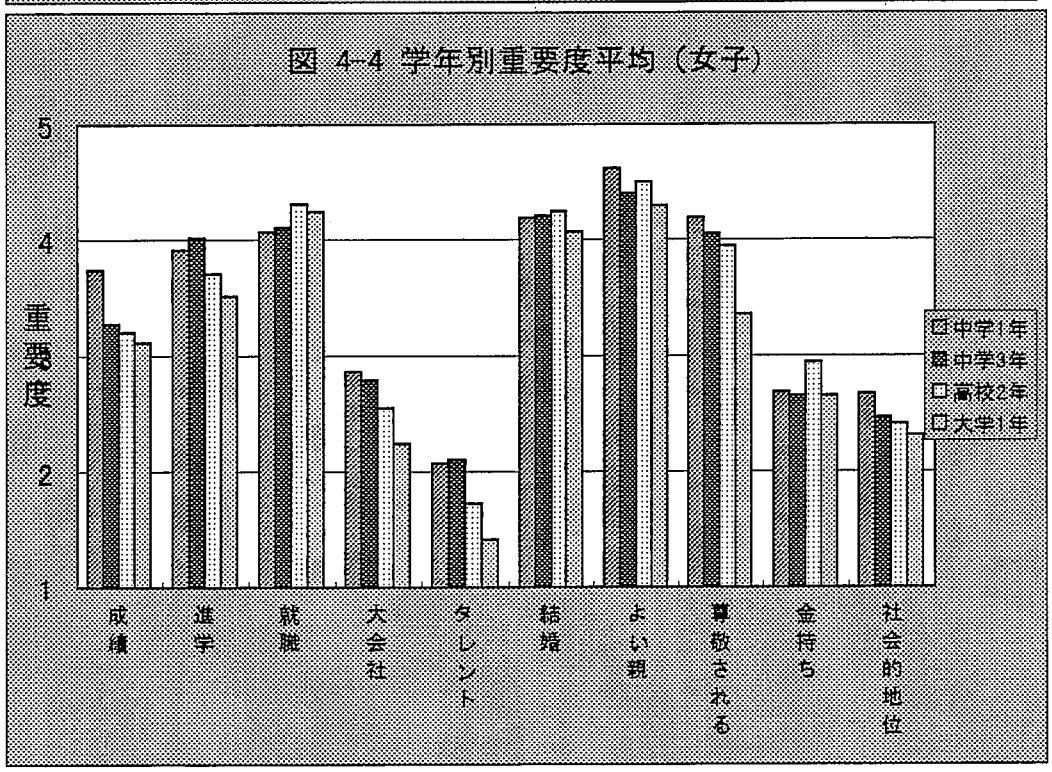


図 4-4 学年別重要度平均（女子）



「結婚」「よい親」および「金持ち」「社会的地位」については性差が認められた。女子では男子と比較して、「金持ち」「社会的地位」の重要度は低く、「結婚」「よい親」

の重要度が高くなっていた。全体として経済的・社会的成功よりも家庭的な幸福を求めている傾向が見られるが、女子ではこの傾向がより顕著になっている。経済的・社会的成功は男子では重要とも重要でないともいえない中間的な位置にあるのに対して、女子でははっきり重要でない方向に傾いている。

学年により傾向を見ると、概ね学年が上がるにつれ重要度がさがる傾向が伺える。成長とともに各人の価値観がしだいにはっきりし、重要だと考えるものが個別化していくのにともない、全体として想定された項目の重要度が低下するのだと考えられる。特に「成績」「進学」など学業達成に関する項目での低下の程度は著しい。中学生では学業が生活の大きな部分を占めており、彼らが学業場面での成功に多大な関心を寄せていることが示唆され、翻って学業場面での成功に関する効力感が中学生では、大きな意味を持つことが推測される。一方「結婚」および「就職」は学年を通していずれも高い水準にあり、変化はない。自分の希望する仕事を見いだしその職に就くことと、望ましい相手を見いだして持続的な関係を取り結ぶことが、青年期の主要な課題であると考えれば、当然のことながらうなずける結果である。

３．逸脱行為や被害体験・被害不安と効力感の関係

(1)　逸脱行為の多少と効力感

逸脱行動の多い少年と少ない少年とでの効力感の相違について検討した。

まず不良行為について、２章に記述した基準に従って、多い少年、中間的な少年、及び少ない少年の３群に分け、それぞれの群の効力感の平均値を図４－５に示した。不良行為の多い少年の方が、効力感が低い項目、逆に不良行為の多い少年で効力感の高い項目、不良行為の多少と効力感との間で関係の認められない項目に分けることができる。すなわち「成績」「進学」の学業達成や「就職」「大会社」といった職業達成の項目においては、いずれも不良行為の多い少年群で効力感が低下しているが、逆に「タレント」と「結婚」「よい親」といった家庭的な領域での成功については不良行為の多い群において効力感が高い。また「尊敬される」「金持ち」「社会的地位」などの社会関係における成功に関しては関連が認められない。こうした結果から不良行為の多い少年は、学業達成や職業達成での効力感を持ちにくくなっており、その代償を家庭的幸福に求めていると考えることができるかもしれない。職業達成が現在の社会において学業場面での成功の延長戦上にあるとすれば、従来の研究が示しているように、当面の課題である学業達成において十分な効